

精子・卵子の提供により生まれた人(子ども)のための ライフストーリーブック作成の試み

才村 眞理

はじめに

精子・卵子の提供により生まれた人(子ども)とは、親が不妊である場合に第三者の精子提供(Donor Insemination, 以後DIという)や卵子提供により妊娠し、その結果、生まれた人(子ども)のことである。日本ではDIで生まれた人(DI者という)はすでに1万人以上いると言われているが、その出自については秘密にされている。ある日突然成人して出生の真実を知ったDI者は、自身のアイデンティティ・クライシスに陥る(渡辺 2002)。関わった医師はDIで生んだことを子どもに秘密にするよう薦め、親も話さずに来た(吉村 2008)。そしてそういった医療技術が実施されていることを社会も黙認してきた。子どもには子どもの権利条約に規定されている、出自を知る権利があり(才村 2007)、家庭でずっと重大な秘密を抱えて育つことは親子関係にも良くないと思われる。子どもの知る権利の阻害を社会も黙認しており、これは子どもへの社会的虐待(才村ら 2008, 宮嶋 2011)にあたると思われる。そういった子どもたち(大人)が自身のライフストーリーに向き合い、アイデンティティの再構築の一助になることを期待して、DI者だけでなく卵子提供で生まれた人(子ども)も含めて、ライフス

トーリーワーク(Tony Ryanら 2003:才村ら 2010)を実施するためのツールとしての、ライフストーリーブック(以後「ブック2」という)を作成した。これは、施設や里親宅で暮らしている子どもたちへのライフストーリーワークを実施するためのツールとしてのブック(「ブック1」という)(才村ら 2009)をもとに、「精子・卵子の提供により生まれた人(子ども)のためのライフストーリーブック」(「ブック2」¹⁾)を作成したものであり、社会的養護の児童向けに作成されたものを生殖技術の分野に応用できるのか、ひとつの挑戦であるが、当事者へのインタビュー調査をもとに作成を試みた。

研究目的

この研究では、DI者の発話をもとに、DI者の知る権利の阻害による苦悩とその問題解決の方法を明らかにすること、および、「ブック1」を土台として、問題解決の方法の一つとしての「ブック2」の作成の試みを目的とした。

研究方法

DI者の発話をもとにKJ法により、発話の名づけ、カテゴリーに分類した。発話を「DI者の苦悩」、「問題解決の方法」「ブック2を

使ったライフストーリーワーク」の3項目に
 向け、その関連性をFigure 1、Figure 2に
 表した。DI者の発話は、3回のグループイ
 ンタビューとJASPCAN（日本子ども虐待防
 止学会）分科会の発表における語りによるも
 のである。それぞれDI者の了解を得てICレ
 コーダーに録音し記録した。なお、インタビュー
 の発話として本研究に使用したものは、DI
 者の発話のみである。発話抽出の詳細は以下
 のとおりである。3回のインタビューについ
 ては、対象者；1回目；2011年1月15日、DI者
 4名（ABCD）及び専門家（小児科医）1名、
 2回目；同年2月12日DI者4名（ABCD）、
 3回目；同年5月28日 DI者5名（ABCDE）
 及び研究者（福祉）1名である。3回とも、
 同じ場所（都内の病院内会議室で静かでプ
 ライバシーの確保できる場所）、同じ時間帯
 （pm 1：30-5：00）であり、方法としては、
 DI者に対して集団で、ブック2の作成につ
 いての意見を、筆者が問うものであり、自由
 に語ってもらった。なお、すべての発話に含
 まれる、DI者は5名であり、上記にABCDE
 で示した。そのうちDI者1名Aに対して、
 筆者は2008年12月より2011年12月までブック
 1をもとに、ライフストーリーワーク²⁾を
 実施している。インタビューは筆者が説明し
 意見を問う以外に、Aはその経験をもとにブ
 ック1からブック2への変更点を提案し、経験
 のない他の4名のDI者が応える内容も含め、
 インタビューを実施している。このインタビ
 ューをもとに、筆者はブック2（案）を作成し、
 その後個別にABCDEにより、修正意見を
 もらい、ブック2を完成した。次に、分科会
 の発話であるが、2011年12月2日18：30-20：

30の分科会「第三者の関わる生殖技術により
 生まれた子どもの知る権利—当事者の声より
 考える、および、ライフストーリーブックの
 試み」で、発表したDI者（3名：ABE）の
 発言を発話とした。DI者の了解を得てICレ
 コーダーに録音し記録した。この発表のDI
 者の語りは、ブック2の試みに関する意見・
 感想を取り上げた。（なお、この論文発表に
 際し、ABCDEの同意を得ている。）

結果

DI者の発話をもとに、名づけをし、カテ
 ゴリー化を行った。カテゴリーについては、
 Table 1「DI者の苦悩」、Table 2「問題解決
 の方法」、Table 3「ライフストーリーブック
 （ブック2）を使ったライフストーリーワーク」
 で表し、Table 3については、さらに詳細に
 ブック1の経験者Aと他の未経験者BCDEと
 の発話を比較したTable 4を追加した。その
 関係図をFigure 1、Figure 2に表した。日
 本で自身がDI者と知り、表に現れている人
 はほとんどいない状況であるため、インタビ
 ュー対象者として5名という小人数になることは
 やむを得ない。

次にインタビューを基に、ブック2を作成
 した。

Table 1 DI者の苦悩 [Table 1～3()は筆者が説
 明のため加筆]

{カテゴリー}	{サブカテゴリー}	{発話内容(抄)}
ずっと秘 密にされ ていた	親への怒り	「親がこの技術を認めていない ことが大きい」「親にぶつけら れない」「怒りを出せなかった」
	親類への怒り	「親類が父親は背が高いから あなたも高いわねと言っていた。 しかし、それが違っていたとな ると、やっぱり嘘だったのだ、 親類にもだまされていたのかと 思った」

	アイデンティティの喪失	「生きていることを肯定できない」「今ここにいることを肯定できない」「すごく不安」「宙に浮く感じである」「アイデンティティの消失」「人生の下から積み上げてきたものが違っていった」
	出自を知る権利	「食べ物でも産地とかあるのに、どこから来たのかわからないと気持ち悪い」
	近親婚の可能性	「もし結婚したらどうするのか」
	子ども時代の不信	「隠しごとがある家族は良くない。子どもが知るのではないかと、子ども時代監視されていることがあったかなと思う」
	自責	「知らなかった自分も馬鹿だったなと思った」
突然の告知	過去の消失	「自分の過去が自分のものでなくなった感じ」
	親の状況の悪い時に告知	「海外の調査で、家族の離婚、父又は母の重篤な病気がある時、耐えきれずに子どもに話すという状況がある」「父が遺伝的病気で知った」「別居していた両親が離婚することになり、実はねと母から、父とは血がつながっていなかったと聞いた」「子どもが遺伝子検査で突発的に知るというパターン」「親子関係に疑問を持っている子どもは商業ベースで簡単に血液検査ができるということがある」
	成人してから突然知る	「29年間生きていて初めて知った、それまで疑いもなかった」「突発的に知られることが問題」
人工的	気持ち悪さ	「いやとしか言えない」「人工的な気持ち悪さ」
子どものサポート環境がない	告知後のサポート環境がない	「知った時のDIをめぐる状況はひどいものだった。他に団体やそういう子どもがいるのではないかと思ったが、いなかった」「医学書にたった5行しか載っていない、そんなマイナーな医療をなぜやったのだろう」「突然のアイデンティティが崩れるので、それを建て直す環境が整えられていない」「ちゃんと相談できる相手がない」「相談窓口がない」
	親のサポートがない	「家族内で一番サポートしてほしいのは母親、両親であるのに、僕にかまってくれるのではなく、あなたが知るからいけない、私は大変だったのだという母親」

	怒りを出せない	「両親が被害者であなが悪いという家族内で、子どもの立場はない」「告知された時、母が大変ということで、アイデンティティの崩れはなかった」「知った時の状況は(親に)言いたいけれどできない」
親子関係の悪さ	思い出の喪失	「楽しい思い出は皆とぶので家族と楽しかったことがみんななくなる」
	怒り	「母に怒っていた時期がとても長かった」
	親の死後に出る	「母から告知され、3年後母が亡くなったが、その後私は崩れた」
	変な関係	「告知が遅かったので、今の家族も変な感じとなっている」
結婚し子どもがいること	混乱	「なんて結婚したんだろう」
	自身の家族への告知	「聞いた夜に夫に話し、子どもにも話した」「おじいちゃんね、お母さんのお父さんではないのよと、子どもに、ごはん食べてても話し常に話をしていた」「(ある)子はゆゆしきことだと思っている」「(ある)子は結婚しないと言っている」
(DIで生まれたと成人して)知って良かったこと	社会的サポートの可能性	「私たちの世代は社会的保護を受けするのは難しかった。しかしこれからは、社会的サポートを受けていくことが出来るかもしれない」
	父との関係に納得	「父とは希薄な関係だったし、嫌いという感情があった。一方、家族関係の中で血が繋がっていないと思っていた。しかし、事実を知って納得した。父親についても大変だったのかなと思い、嫌いではない良好な形に変わってきて、自分の中では楽になったのかなと思った」「30年別居という夫婦だった。どうして一人娘がかわいくないんだろう、自分が生まれてきたことが悪かったのかなと思っていた。聞いて、あー2人の問題だなと思った」「父にも母にも似ていない、それが腑に落ちた感じ。自分らしくていいのだというところが良かった」
	ドナーを探す	「実際に自分が父を捜しているのだという土俵で代償行為ができた。もし10歳なら何もできなかった」

Table 2 問題解決の方法

{カテゴリー}	{サブカテゴリー}	{発話内容(抄)}
ドナーに 対して	家族への所属	「ドナーから来たものを今の家族に所属させることが大事だ」 「ドナーの存在を消してはダメ」 「(不妊を) なかったことにするのはだめ」
	探す	「父親候補の写真を集めている。似ている、似ていないと調べている。実際に会うと『大変だったね』、『僕は違うから』という」 「医師に会いに行った。会いに来てくれてうれしいとは言ったが、日本では子どもの権利がどうしたとかは言わない」 「知りたいのは当然だという考え方をわかってほしい」 「わからないことが大変だとわかってくれればいいけれど、わかってもらえない」
告知につ いて	出自を知る	「告知は早い方がいい」「ちょっとずつ話すことが大事、2, 3歳の子に言うのが親も言いやすいと思う」「例えば3歳の誕生日に言うとかがいいと思う」
	誠実に	「何度も、わかる情報を子どもに誠実に伝えていく姿勢が大事」
	楽しいこととセットで	「誕生日で祝われている、楽しいこととセットで話されることがいいと思う。辛いこととセットはだめだ」 「出自に関して、二重の辛さを味わっている。1つ目は突然知ること、2つ目は親の状況の悪いこととセットになっていること」 「告知さればうまくいくかはわからない」「どんな年齢でも告知があれば苦難が来るし、それを乗り越えるという過程があると思う。告知したからこれで済んだと思われたくない」
	告知して終わりではなくそこから始まる	「告知して終わりではなく、そこから始まるので、生き直しなんです」
	親の選択	「両親が子どもに事実を話さないといけないという法律が出来ても、話すのは両親が選択」
	親に対し	「DIを選択する時点で、親が自信を持ってこの技術を選択していない」 「普通に妊娠した、普通の家族だと見せかけていることが問題」

	子どもに寄り添う	「子どもがこういうことを知りたがっているとか、家族の中でサポートしていかなければ」
	選択できる	「親は選択肢があったのだから、辞めることもできた」
	この技術で生ま れたいかの視点	「自分が生まれたいかどうか、聞きたい、その視点がないとだめ」
	血縁への拘り	「生殖技術は血縁にこだわっている」
第三者の 関わる生 殖技術に 対して	子どもの意見を 聞く	「いまだに『子どもは事実を知らない方がいいのではないかと私は思う』という意見が存在する。じゃあ子どもに意見を聞こうというのはいない」「何が不満なの？とわかってもらえない」「DIが始まって60年以上上たってはじめて当事者の意見が出てきた。ここで初めてDIについての是非を議論する時に来たのに、議論されていないことが問題である」 「2007年日本学術会議の生殖補助医療あり方検討委員会で、DIは認められてきたように考えられていることが問題である」 「法整備さえしたらよいのか」
	気持ち悪さ	「無償で精子をネットであげると出ている、命をもらいに行くのが気持ち悪い」
	生む権利への 対抗	「子どもがほしいという人間の欲求と、産婦人科の意図でどんどん進めていこうとなっている」
	親への教育の 必要	「WHOとかで、子どもの団体と親の団体の連携や教育が必要」
	オープンさが必 要	「いまだに隠したいために別の病院に行って出産するという事態がある」 「ここ2, 3年、一部の産婦人科医は話す方がいいと言いだめた」
	医師の役割	「善意の学生もいたという言葉もいや。医師の説明がきちんとすべきだったのに、命を作るということに対する意識がない」 「医師に、自分がそれで生まれてもいいの？と聞きたい」「知りたくないというのは、自分がそうはなりたくないから」
出自を知 る権利に ついて	「遺伝的親を知りたい」	
		「遺伝的な親は誰かわからない」「アメリカのビルは50歳になっても親が誰かわからないので、探している」 「実際に父に会えたらうれしい」

	きょうだいを知る	「きょうだいは10人くらいいるとされている、異母きょうだいにも会いたい」
養子・里親との比較	親を知る権利	「養子は親を知りたいのは当然だという考えがあるのがうらやましい」
	後ろめたさ	「里親ってえらいことをやっている夫婦、生殖技術は後ろめたい感じがする」
	覚悟	「養親は覚悟がある、養子は夫婦どちらも自分の子ではない」
絵本	絵本を使う	「日本でようやくテリングの絵本ができた」「両親が離婚する時ではなくて、しっかりと絵本を使って伝える」
	絵本の内容	「親切な男性がいて一という言葉がいい」「養子は最初から覚悟しているが、生殖技術(をやる親)は乗り越えていないため、絵本は最初からばら色にしたいのだ、そんなものではないと思う、最初からハッピーですまそうとしている」

Table 3 ライフストーリーブック(ブック2)を使ったライフストーリーワーク(ブック2をここでブックという)

(カテゴリー)	{サブカテゴリー}	{発話内容(抄)} (A)の発話と他のDI者(他)の発話とを区別して記載 (A自身の感想・考察の影響を受け、(他)のDI者の意味づけや意見を引き出しているとみられた箇所; 下線)
意義	意味づけ	(A)「 <u>こういうことをやらないと自分を立て直せない状況だ</u> ということを知ってもらいたい」 「ライフストーリーブックに取り組むこと、つまり、自分の気持ちと向き合うことは、とても苦しい体験ではあるけれど」「ブックがあることで、どこから話していいかわからないと思っていたことを話すきっかけになるかなと思う」 (他)「子どもが自分自身、過去を振りかえる方法、ブックがあるのかな」「 <u>こういうのがありますよ</u> という説明のためにもブックは必要」
方法	はじめる	(A)「 <u>すごく勧められたわけではない</u> 。私の方からぜひやりたい、でも関係性がどんどん変化するかもしれないし、ちょっとやってみて、大丈夫であればやりましょう」と「最

		初初めて見た時涙がボロボロ出た」「これをやる時期は、自傷行為があるときなど非常に精神的に不安定な時期はできない、少し落ち着いた時期にすること」 (他)「自分が何者かまとめ直すのは急性期は無理だろう」
	ブックに書く	(A)「現在の親との関係、亡くなっていたが、言いたかったことを書いてもよい」
	気持の吟味	(他)「DIの話題について親と話をしていますか?したいですか?できますか?—今言いたいことを実際に言う前にここでまず言ってみる、吟味する」
	信頼できる人=実施者	(A)「信頼できる人と会えること、悲しいことや嫌なことを全部交えてきてもらえることがいいな」「DIで生まれた人が同じDIで生まれた人にやることがあってもいいかと思う」「 <u>本当に信頼できる人でないと</u> 言えないなと思う」「『一生かけて支える』と言ってくれたが、それくらいの気持ちがないとできないものだ」 (他)「ブックは信頼できる他者と共に実施するもの、DIの分野に実際にそのような人がいるのか」「一人で作るのは危険」「さしあたっては自分の信頼できる人をさがすことになる」
	定期的実施	(A)「定期的にやらなければ、ほったらかしにされたように思う」「 <u>何回も日を決めて会って</u> 」
	ブックの内容	(A)「自分の本当の話をしないと意味がない」「全然関係ないことを聞かれているうちに、 <u>だんだん核心に向くことがある</u> 」 「本当の気持ちを出す」「告知を受け入れるのが大変なので、細かい項目があっていい。悲しかったことは何ですか?納得できたことはありましたか?うれしかったことは?」 (他)「出来あがった後に告知されたので、告知前の自分について聞いてもらい、その後、告知後の親と自分の関係を聞いてほしい」「ドナーにどうして提供したんですかと聞く場面があっていい」「 <u>受け止められないけれど、どうしようというところをやる</u> 」『この技術について』という項目があっていい」「ドナーに会ってみたいですかと聞く」「きょうだいを

施設の子どもの違い	<p>さがす」「連絡とれない時の気持ちを聞く」「振り返って、親に聞く項目があっていい、想像で書いてもいい、親に言いたいことがある」「病院に対して言いたいことごとくある。私たちはどこの病院が重要、出産したところではなく、技術を行った病院」</p> <p>(A)「施設の子どもの自分の過去を拾いに行く作業、しかし自分たちは過去を捨てる作業かな、過去を思い出しながら、これはウソの上だったのだと思った。——しかし、今ひとつうまく説明できていないのかなと思う」</p> <p>(他)「(施設の子どもには)点滴のように告知することになっているが、この場合(DI)はどっと来ているので、まったく違う」</p>
嫌な気持ち	<p>(A)「これで意味があるのかと言った」</p>
守秘義務	<p>(他)「ここに書いたことは親にも言いません、親に対して否定的なことも書いていいということ、怒りを出してもいいのだ、自分の感情があって当たり前だ」</p>
苦悩	<p>(A)「最初は小さい頃どんな歌が好きだったかななどで進められたが、未来については書けない」「これ何になるのでしょうねと言ってしまった」「未来がどうしても描けない、何にもしたくない日がある」「小さい頃から始めて今に近づくとしんどくなってきた」</p>
悲しみ・怒り	<p>(A)「これ読んでるだけで泣けますー泣くのは何かあるのですよと言われた」「しっかり怒らないと前へ行けないな、しっかり悲しまないと前へ行けないなと思う」「嫌な気持ちが出てくることも大事なかな」「誰にも会いたくないとか、いやな気持ちが初めて出てきたなという気持ちになった」</p>
出自	<p>(他)「出自の問題は整理が出来たからといって楽になるとは言えない」</p>
カバーストーリーの作成	<p>(他)「話しても無駄な人、少し話せる人、全部話せる人、があってもいい」「この段階の人はこの辺まで話すとかあっていいかな」</p>

他の取組	家族関係の整理	<p>(A)「父も母もいないので今の自分の家族関係の整理ができない」「母に怒っている自分に対しての罪悪感はあるが、まあいいやと思ってきた」「これやって親と向き合う段階が必要、ただこれやっていいというものではない」</p> <p>(他)「父と母とを分けた方がいい」「親との関係性をどう修復するか」「親に怒りをぶつけないといけない、怒りや波風立って回復する」</p>
	自助グループ	<p>(他)「親は変わるのは無理だから、親は置いて、当事者のつながりて何とかしたい」</p>
効果	家族関係の整理を実行できる条件	<p>(他)「告知後の親にも何かしないとだめではないか」「親は親側で同じように、子どもが聞きたいことを聞いても応えられるような親側の準備が必要」「親のサポートも子どものサポートも必要」</p>
	心の奥底の感情	<p>(A)「やっているうちに心の奥底にあった感情に気づくということはある」</p>
アイデンティティの再構築	心の中に苦悩をおける部屋ができる	<p>(A)「ブックはしんどかったが、わかったことがある。今、どういう気持ちなのか、客観的に見える、それをよこらしょつと横におけるようになった」「ガラクタを要らないけれど、おける部屋が心の中にできた」</p>
		<p>(A)「DIで生まれた人は知らなかったということ崩れ、自分がなんでここにいるのだろう、言葉でわかるようになった」「今は平気になっているが、また平気にならない日も来るかもしれないが、良き社会人として暮らしていつている感じである」「人間不信でいっぱいだったが、何か心が穏やかになって、自分の毎日が穏やかに過ごしたいなあと思えるようになった」</p>

Table 4 ブック1の経験者Aと未経験のBCDEの発話の比較

サブ・カテゴリー	Aの発話	他(BCDE)の発話	わかったこと
意味づけ	<p>こういうことをやらないと自分を立て直せない、話すきっかけ</p>	<p>過去を振りかえる方法、ブックがある、こういうのがありますよという説明</p>	<p>ブック2の意義</p>

Table 4 ブック1の経験者Aと未経験のBCDEの発話の比較(続き)

はじめる時期	非常に精神的不安定な時期はできない	急性期は無理	実施の可能性
気持の吟味	親との関係、言いたかったことを書いてもよい	親と話をしていますか、言いたいことを実際に言う前にここでまず言ってみる、吟味	父母に対して言いたいことを言う必要性
実施者	ほんとうに信頼できる人でないとダメ	信頼できる他者と共に実施、信頼できる人をさがす	信頼できる他者をさがす
ブックの内容	自分の本当の話、だんだん核心に向く、告知を受け入れるのが大変	告知前の自分について聞いてもらい、その後、告知後の親と自分の関係を聞いてほしい、受け止められないけれど、どうしようというところをやる、親に言いたいことがある、病院に言いたいことがすごくある	「告知を受けた時のこと」の項目がいる
施設の子どもの違い	施設の子どもの自分の過去を拾いに行く	この場合(DI)はどっと来ている	ブック1とブック2の違い
家族関係の整理	家族関係の整理、これをして親と向き合う段階が必要	親との関係性をどう修復するか、怒りや波立って回復する	ブック2の活用の流れ
自助グループ	父も母もない	親は変わるの無理、当事者のつながり	自助グループによるピアサポート
効果	ガラクタを要らないけれど、おける部屋が心の中に出来た	自分が何者かまとめ直す	心の整理、アイデンティティの再構築につながる

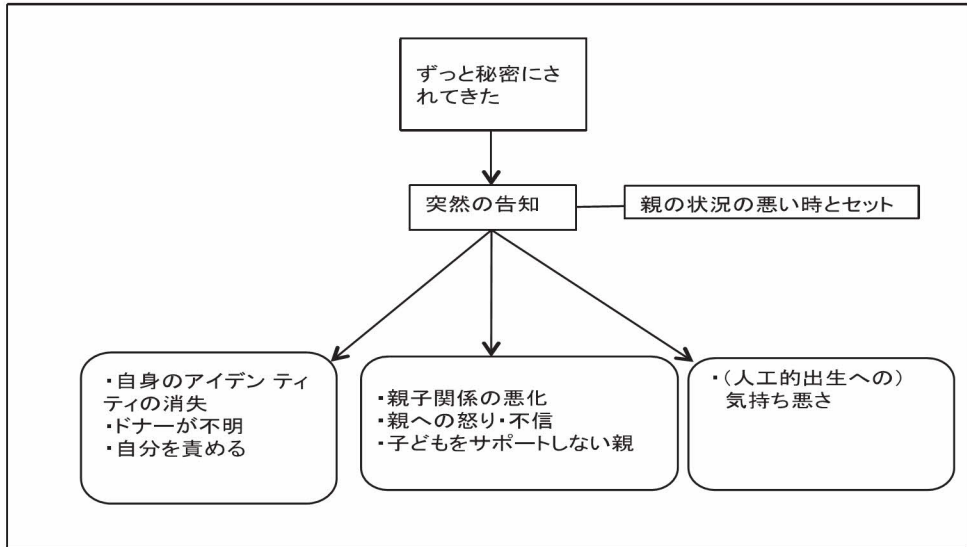
完成したブック2の項目はTable5の通りである。作成のベースとしたブック1との比較により示した。ブック2とは、質問紙法により、精子・卵子の提供により生まれた人が、信頼できる人のサポートのもとに、応えていき、過去に何が起こって現在までできたか、その事実と感情を書きこむノートであり、定期

的に時間を取りワークをすると、過去を受け入れ、現在を生きることができ、未来を予想することが出来るものである。紙面の都合上、章の詳細な内容や使い方の手引きの内容は省略する。

Table 5 作成したブック2のブック1からの変更点

ブック2の章	ブック1の章	変更内容
1 わたしについて知っていること	変更なし	
2 わたしの健康	変更ほとんどなし	予防接種の記録は省いた。
3 わたしが生まれた家族	少し変更	両親が精子提供、卵子提供を選択したのはなぜ?(追加)
4 告知を受けた時のこと(変更)	4 生みの親と家族に連絡をとる(削除)	精子・卵子の提供で生まれたことを知ったのはいつで、誰がどのように話し、その時感じたことを聞く。病院の主治医についても聞く。父母に対して言いたいことを言う、など。(変更)
5 提供者、そして、同じ提供者から生まれたきょうだい(変更)	5 地図と移動(削除)	提供者やきょうだいについての気持ちを書く。会ってみたいか、何を聞きたいか、連絡がとれた場合の感想など。(変更)
6 わたしの考えと気持ち	変更なし	
7 今のわたしと家族(変更)	7 特別な思い出(削除) 8 今のわたしについて(変更)	ブック1は、今暮らしている施設生活のことを扱っている。ブック2の場合は、出生の真実を知った後、今の家族や友人がそれをどう対応しているかについて扱っている。
8 わたしの学校	9 わたしの学校	ブック2は、子どもから大人までできるように、幼稚園から大学まで書けるようにしている。
9 わたしの職場(追加)		大人もできるように職場を追加している
10 ある1週間を振り返る	変更なし	
11 第三者の関わる生殖技術について思うこと(追加)	なし	すべてをやってみてもう少しやれそうな人は、生殖技術についての考えを書く
12 未来	変更なし	

DI者の苦悩



問題解決を目指す支援方法

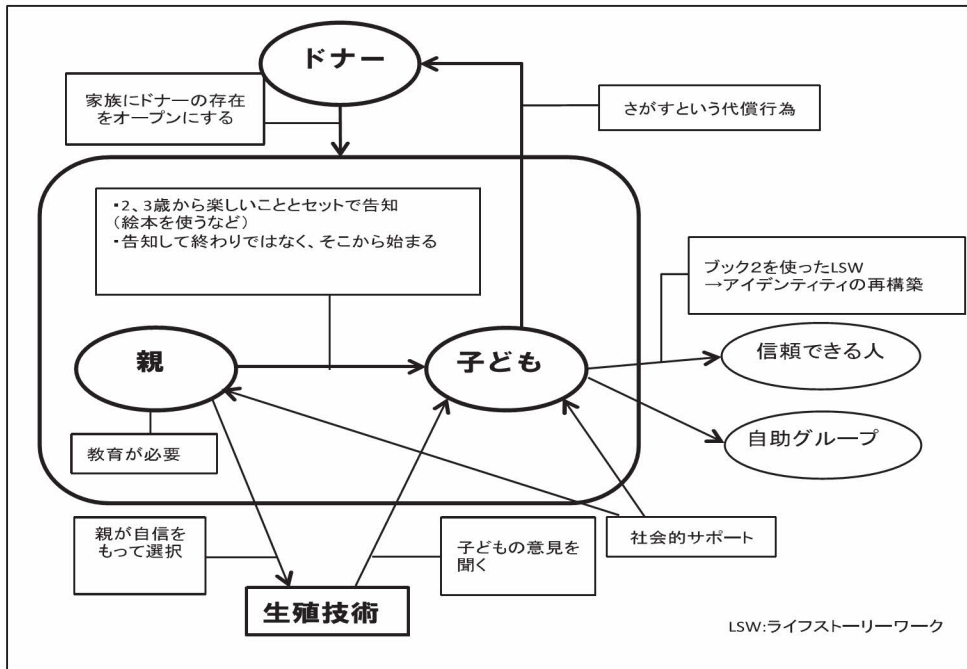


Figure 1 DI者の苦悩および問題解決の方法

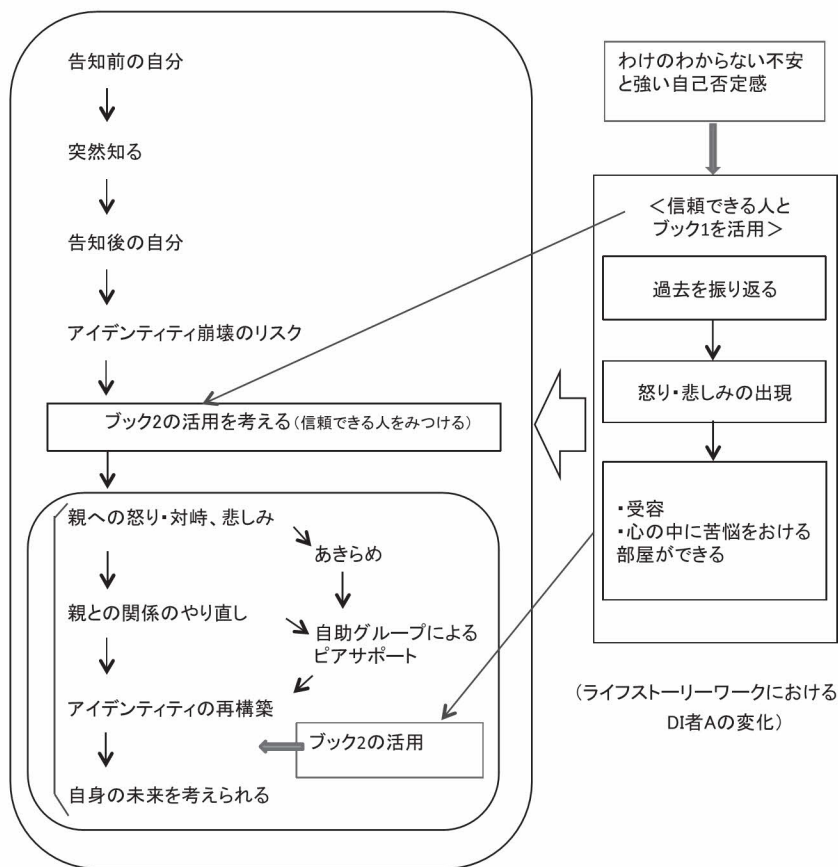


Figure 2 ブック2を活用したライフストーリーワークの展望

考察

Figure 1 により、DI者の苦悩は、ずっとDIで生まれたことを秘密にされ、成人になり突然、出生の真実を知ったことで、①自身のルーツであるドナーが不明である、自身のアイデンティティの崩壊のリスクがある、②騙されていたことで親子関係の悪化、③人工的に生まれたことにより気持ち悪さを感じている、という三重苦に陥っていることがわかった。この苦悩への解決策として、以下のさまざまな方策がDI者より提案された。つまり、

親が自信を持って生殖技術を選択、2、3歳の頃より子どもへの継続的告知、ドナーを秘密にするのではなく家族にドナーの存在をオープンにすること、生殖技術を進める側は子どもの意見を聞くこと、子どもも親も社会的サポートを受けられること、子どもは自助グループ活動をすることである。その上で、DI者は信頼できる人を見つけてブック2を使ったライフストーリーワークを行うことも、解決策の一つであると提案された。次に、Figure 2により、ブック2を活用したライフストーリーワークでは、ブック1を使いライフストーリー

リワークの経験のあるDI者の例が示すように、信頼できる人と共に、過去を振り返ると、親への怒り、悲しみが出現し、その後、DIで生まれたことを受容し、「心の中に苦悩(ガラクタ)をおける部屋ができる」と表現されるように、苦悩に押しつぶされずに生きていくことが出来、未来を考えられるようになることが予想された。

以上、DI者自身の発話により、DI者の知る権利の阻害による苦悩及びその解決策と、ブック2の意義について予測することができた。これらのインタビューをもとに成果物としてブック2作成を試みた。ブック2では、特に、告知を受けた時の感情を表現できるよう、この医療技術を選択した父母への感情や提供者への感情、そして医師へも言いたいことが言えるよう工夫し、現在の家族生活での対応や第三者の関わる生殖技術に対する意見まで言う場を作ることが、ブック1との違いであった。

おわりに

今回作成したブック2は試作であり、その効果は今後実際に使用し検証する必要がある、本研究の限界である。本研究はブック作成のための研究であり、実際の効果を測定したのではなく、作成にあたっての当事者の意見を集約したに過ぎない。実施の効果測定は今後の研究に譲りたい。

(なお、この研究は、平成23年度科学研究費(基盤研究C)による研究課題「子どもの知る権利擁護におけるライフストーリーワークのあり方」によるものである。また、この論文公表について平成24年11月帝塚山大学研

究倫理委員会より承認されている。)

注)

- 1) 才村眞理(2011) 精子・卵子の提供により生まれた人(子ども)のためのライフストーリーブック, 2011年度科学研究費補助金による研究課題「子どもの知る権利擁護におけるライフストーリーワークのあり方」(研究代表者 才村眞理)の助成により作成。
- 2) 詳細は省略するが、主に月1回2~3時間、DI者Aに対して筆者が個別に、プライバシーが確保できる場所で、ブック1を使用して、小さい頃や現在、そして最終的には未来について語ってもらい、ブック1に記しながらライフストーリーワークを実施した。ライフストーリーワークとは、過去の生い立ちを自身の人生に組み入れ、現在の生きている意味を確実にし、未来の人生を選択するための作業と言える。このライフストーリーワークの効果等についての研究は後に譲る。

文献

- 宮嶋淳(2011) DI者の権利擁護とソーシャルワーク, 福村出版, 161-163.
- 才村眞理(2007) 特集代理出産 心理福祉の立場から, 産婦人科の世界 59,10 . 45.
- 才村眞理. 宮嶋淳. 坂本正子他(2008) 生殖補助医療で生まれた子どもの出自を知る権利, 福村出版, 216-228.
- 才村眞理・大阪ライフストーリー研究会(2009) 生まれた家族から離れて暮らす子どもたちのためのライフストーリーブック, 福村出版
- Tony RyAn AnD RoDgEr WalkEr(2003) LifE Story Work - A prActiCAl guiDE to hElping ChilDrEn unDErstAnD thEir pAst, British AssoCiAtion for ADoptiOn AnD PostEring, (才村眞理. 浅野恭子, 益田啓裕 監訳. 2010, 生まれた家族から離れて暮らす子どもたちのための ライフストーリーワーク 実践ガイド, 福村出版)
- 渡辺久子(2002) 生殖補助医療で生まれた子どもの心, 助産師雑誌 56; 2; 43-49.
- 吉村泰典(2008) 精子提供により子どもを得た日本

人夫婦の告知に対する意見～第2報. 厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業 生殖補助医療の医療技術の標準化、安全性の確保と生殖補助医療により生まれた児の長期予後の検証に関する研究 平成20年度研究報告書(主任研究者 吉村榮典). 51-87.

A Trial to Make Life Story Books for Adults (Children) born through Gametes Donation

Mari Saimura

Abstract

In Japan, few adults (children) born through gametes donation can know their origin because, doctors concerned, recommended the parents that they keep this secret from their children about being born through gametes donation. Therefore, parents did not tell the truth to their children.

As a result, children were brought up, not knowing their origins.

Out of 10,000 Donor Insemination (DI) people in Japan, only a handful of DI people have , by chance, found out the truth about their birth. All of them have fallen into an identity crisis.

In this study, I had a narrative interview with 5 DI adults.

From the contents of these interviews, my conclusions are as follows;

All of them were distressed. I suggest ways to cope with difficult situation. One of the ways to cope with this is, through life story work.

In addition, I made life story books for adults (children) born through gametes donation, by adopting life story books for children in children's home and foster care.

I am expecting that DI adults (children) will alter their life story and could remake their own identity.

Key words : life story book, adults (children) born through gametes donation, life story work